

灰谷健次郎

砂場の少年



新潮文庫

すな ば しょう
砂 場 の 少 年

新潮文庫

は - 8 - 11

平成二年十一月二十五日
平成四年五月三十日 発行

著 者 灰谷健次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 営業部(〇三)三三六六―五一
編集部(〇三)三三六六―五四〇

振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

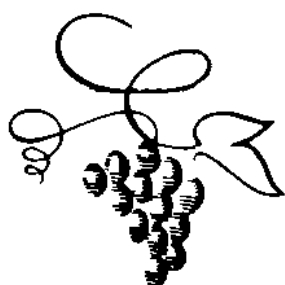
© Kenjiro Haitani 1990 Printed in Japan

ISBN4-10-133111-1 C0193

江苏工业学院图书馆

藏书章

辰谷健次郎著



新潮社版

4565

砂場の少年

挿圖
坪谷
令子

1

はじめに西文平（にしぶんぺい）のような少年に会ったのも何かの因縁（いんねん）だなど、葛原順（くずはらしゆん）は思った。

着任して、教頭先生から職員室の席を指定してもらっているとき、そのちよつとした事件は起こった。

「……しんぼうにも限度というものがあるやろがい。わしは、もうここへなんぼ足を運んどるんや」

突然、激昂（げつこう）した声がきこえた。

そこが職員室だったので、葛原順はびっくりした。大きな声を発した男の前に、中年の女教師がいる。

「四回もここへきとるんや。授業の終わるまでじっと待たされてやで。え、あんた、いったい何さまや。学校の先生ちゆうのはそないにえらいんかい」

男の見幕（けんまく）に気圧（きあつ）されて、その女教師は青ざめている。そんないわれ方に、腹も立っているらしく、唇（くちびる）の端が細かく震（ふる）えていた。

「形が気に入らん、色が好みに合わん、そういうのは物を買う方の勝手やけど、その都度足を運ぶ人間の身イにもなってくれ。アイロン一つ売ってなんぼの儲け（もろけ）になると思うとるんか。」

商売人にとって時間は金のうちや」

まあまあと教頭先生はふたりの中に割って入った。

「学校の先生は世間知らずで常識はずれの人間が多いときにとったけど、わが身に降りかかってみると、ぞつとするぞ……」

……それで、よう、人さまの子オが教育できるな、と男は血走った目でその女教師を睨みつけた。

ここではなんだから……と教頭先生はなだめるように男の肩を叩いた。

「ここにおける先生みんなにきいてももらいたいから、わしは大声を出しとるんじや」と男は叫ぶようにいう。

職員室の隅に、一人の男生徒が立たされていた。

妙なあんばいになっていく職員室の空気に、具合が悪いと思ったのか彼を立たせた教師が、わざわざ立っていった

「もうよい。教室へ帰れ」

と少年にいった。

「もう少し立っていますよ」

その少年はとぼけたようにいった。

「いいから帰れといったら帰れ」

少し低い声で、しかし、いらいらしたようすを露骨に見せて、その教師はいった。

と教頭先生はとりあえず男にいった。

「葛原先生。ちようどよかった。あなたの受持ちの生徒がここにいました。彼に教室を案内させますから」

あちこちに気を遣いながら、忙しく教頭先生はいった。

新任の教師と生徒には、この場から一刻も早く去ってもらいたいという気持がありあり見える。

「ちよつと待ってくださいよ、あなた」

教頭先生はもう一度、男にいった。

「なんや」

男はあきらかに不機嫌だ。

氣勢を殺がれ、その気分が口調に出ている。

「ま、ま、ま。すみません」

教頭先生は男を抑えた。少年に何かいった。それから手招きして葛原順を呼んだ。

「彼は三年C組の生徒です。彼に案内させますから教室へいってください。わたしがついていけばいいんだが、なにさまこんなようすだから……」

「そう……ですか……」

教頭先生の方ではなく、怒鳴りこんできた男の方を見ながら、葛原順はちよつと煮え切らないような態度でいった。

事の顛末が気になるふうだ。

「君イ。この先生を君のクラスに案内しなさい。さっき話した君たちの新しい先生だ」
少年はずっと葛原順を見ていたようだ。小さくうなずいた。

「じゃ、お願いするか」

葛原順はいさぎよくいった。

職員室を出るとき、少年は臆することなくかなり大きな声でいった。

「おじさん。いいたいことはいった方がいいよ」

怒鳴りこんできた男は、びっくりしたような顔をして少年を見た。

廊下を歩きながら、葛原順は少年にたずねた。

「君はどうして職員室に立たされていたんだい？」

「授業中、ノートにマンガを書いていたからです」

「よく立たされるの？」

「しよっちゅう」

並んで歩いていたので少年の表情はよくわからなかった。しかし、そうこたえたとき、少年はほほ笑んだという気が葛原順にはした。

「なぜ？」

「なぜっ？」

少年に、そう問い返された。

葛原順はちよつと口ごもつた。

「理由もないのに生徒を立たせる教師がいるとも思えないじゃないか」
少年は

「さア？」

と首を傾げた。

「さアって？」

今度は葛原順がたずねた。

「先生って、そのときの気分で生徒を叱ることが多いと思うナ」
と少年は独り言をいうようにいった。

「そんなのに、いちいち反応してられない」
呟くようにいう。冷めた口振りだった。

「おれはきょうから君のクラスの担任になるのだがね」

「教頭先生からききました」

少年は歩きながら無感動にいった。

「君が職員室に立たされていたことを、もう少し話してもいいかい？」
「いいですよ」

少年はあっさりといった。

「やっぱり反省するわけ？」

「立たされてですか」

「そう」

「別にイ」

葛原順は小さく、うーんといった。

「授業中にマンガを描くのはいいことじゃないだろ。そうは思わないのかい？」
少年はかすかに頭を起こすような身振りをした。

「考え方って、一つじゃないでしょう」

少年は振り向き、はじめて葛原順の顔を見ていった。

葛原順には少年のいうことばの意味がよくわからない。

「どういふことかな」

「授業中にマンガを描くなというのは先生の側の言い分だろうけど、つまんない授業のときはマンガを描く権利だってあるという生徒側の言い分もあるでしょ？」

「なるほど」

思わずそういつてしまつて、葛原順は苦笑いした。

少年はいった。

「先生、変わってますね」

「え、なぜ」

「そんなとき、なるほどなんていう先生はいないと思うよ」

葛原順はちよつと笑った。

「君がおれのことをそう思っているように、おれも君のことを、少し変わった生徒かなと思つていたとこだ」

「へえ」

と少年はいった。

「名前をきかせてくれるかい？」

「西文平です」

「おれは葛原順」

はい、と少年はうなずいた。

葛原順は、この少年に爽快そうかいなものを感じた。

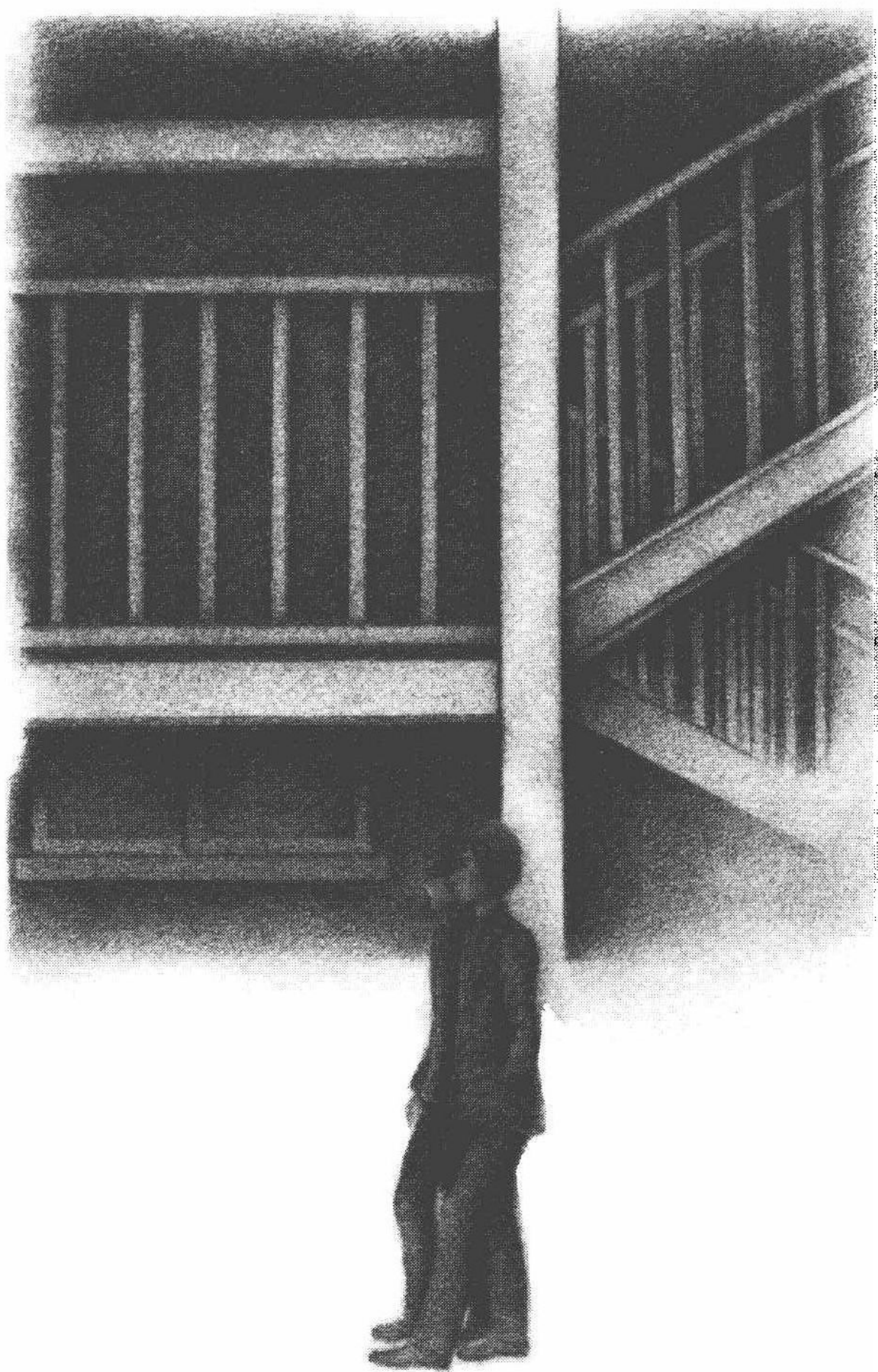
「さきほどの話だがね。例えばつまらない授業っていうのは、どういう授業なんかね」

「教科書や参考書に書いてあることを、オウムみたいにくり返している先生の授業っておもしろいですか」

「……………」

「たまに何か新しいことをいって自慢じまん顔がほするんだけど、自分で受験勉強を進めている奴やつはとつくに知ってることだから、なーんだと思っちゃう。ピエロみたいなもんだよ、そういう先生は」

「しんらつだな」



と葛原順はいった。

「先生が全然勉強をしていないんだから」

少年は手厳しかった。

葛原順は気になることを質問してみた。

「この学校のおおかたの生徒は君のように率直そうちよくなんかい？」

「率直って？」

「教師に対して率直にものをいっているのかってことだけど……」

ああ、と少年はうなずいた。

「先生に、づけずけものをいう奴は問題児にされちゃうからね」

ちよつと大人っぽい口調で少年はいった。

「なるほど。君はどうなんだい？」

「ぼくですか？」

よくいいますねえ、と少年はいたずらっ子のような顔になっていった。

渡り廊下わたりがあり、ふたりはそこを渡った。

じきに三年C組の教室があるらしかった。

葛原順はもう少し、この少年と話してみたいと思った。

「ちよつと校舎のまわりを見てみたいんだが、君、つきあってくれないか」

「いいですよ」

少年は気軽にいった。

ふたりは渡り廊下から、中庭に回った。

休憩時間の喧噪がふたりを包む。

「どうして朝、こなかったんですか」

突然、少年がたずねた。

「えっ？」

葛原順は少年の顔を見た。

「新任の先生は朝きて、朝礼でみんなに紹介されるんでしょう？」

「そうだね」

なんとなく葛原順はうなずいたが、そのとき、友人のことばが頭をかすめた。

〈臨採なんて、こんにちの教育現場ではどだい人間扱いしてもらえない存在なんだからね〉

それから友人は臨時採用教師に対する数々の差別を彼の前でいいたてたものだ。

〈組合だって臨採教師の権利闘争はほとんどやろうとしないさ〉

友人の教師はそんなこともいった。

葛原順は少年にいった。

「手順が狂ったのかもしれないね」

「手順って？」

「職員室で大声を出していた人がいただろう。なんだか教頭先生はあわてていたじゃない